

はじめに

人にはたくさんさんの、そして、さまざまな人生の起点があると思います。

私はその起点で、正解か不正解かわからないまま、ひたすら無我夢中で走ってきました。今振り返ってみれば、それが人生の選択、分岐点だったのかもしれない。

人生は、悩みや決断の繰り返しのように思います。その経験は誰にでもあると思いますし、私の物語もそうだと思います。

IT業界のWeb専門分野で、Web会社を起業して、この本が出るころには早4期目だと思います。起業して経営する。それは昔から強く夢見ていました。しかしそれは、Web業界ではなく、自動車業界で働いていたときに思っていたことです。

「いつか私の店を持ちたい。そのためにいろいろな技術を学んでから起業したい」その一心でした。それがなぜ、自動車業界から転職して、IT業界に来たのか。しかも、まさかのWebという専門分野での起業。私にも、偶然なのか必然なのか、わかっておりません。

10代は、フリーター。

20代は、自動車業界。

30代は、Web業界。

40代で、起業。

経歴にするとこのようなかたちですが、ここに来るまでに、さまざまな障害がありました。

私という人物は、いつから形成されて、いつからこのような性格になったのかと、ふと思うことがあります。

書籍は昔から好きで、よく読んでいました。読んでいたというよりは、漫画の本をたくさん持っていて、ファンタジーな物語にもハマリ、小説などもよく読むようになりました。それもあつてか、活字には抵抗がなく、また、読むスピードも人並み以上に速いかも知れません。今でも、ビジネス書籍や憧れの著名人の書籍などは、目に留まれば読むようにしています。

いつからか、私も「書籍を書いてみたい」と思うようになりました。私の中で書籍というのは、有名

な方や、社会にインパクトを与えた偉人が書く、そのようなイメージで、しかも、出版するにはとてつもない金額がかかるものだと思っていました。

そんなことを思っていた私が、まさか書籍を出すなんて、夢にも思っていないませんでした。

漠然と「書籍を出版したい」と思ってはいたものの、私に知名度があるのかといえば一切ありません。少し変わった人生を過ごし、いろいろな出来事を持ち越えた上で起業した、そんな著名人でもなんでもない私が出す本に、一体誰が興味あるのか。正直、今でもそう思っています。

書籍というのは、昔と違って今は身近な存在になってきていると感じるようになりました。インターネットが普及し、SNSが当たり前で、憧れの著名人も身近な存在に感じ、書籍を出している著者とも、気軽につながれる時代になりました。

今は、「書籍の出し方」と検索すれば、すぐに情報が入ります。それでも、書籍出版のブラックボックス感はありません。

そんなことを思いながらも、そのブラックボックスを開けてみたいという「好奇心」。

私の物語が読者にとっておもしろいかどうかはわからない「ドキドキ感」。

書籍というすばらしいツールで、私がどのような人生を過ごしてきたのかを伝えられる「ワクワク感」。

書籍にはいろいろな気持ちがつまっています。書籍が売れたら印税で暮らせる、そんなことはまったく考えておりません。

たくさんの著名人の本を読む中で、私が影響を受けた人の言葉に「書籍は名刺代わりになり、広告代わりにもなり、それが自分自身のブランディングになる」というものがありました。

私という人物を知ってもらうには、名刺の代わりに、書籍だということ。あざとい考え方もかもしれません。ですが、今は個がブランディングしていく時代になっています。書籍というツールを使うことで、少しでも私に興味を持ってもらえたらと思います。

誰もが書籍を出したいと思っているかもしれない。お金を出せば誰でも出版できる、そのような時代になったかもしれない。そんなことをいくら考えても仕方がない。考える暇があるのなら、まずはやつ

てから考えよう。

誰かの参考になるのか、わかりませんが、思い、挫折、絶望、さまざまなことを経験して起業に至るまでの物語。そんな私物語に、お付き合いいただければと思います。

そう、どんな人でも「必ず物語はある」と思っています。

プロローグ

「退職いたします」

10年以上、長く勤めた会社を辞める決意をしたときだった。勢いで発言した感覚はあったが、その言葉の責任は重い。それを十分に理解して、その場を立ち去った。

今まで、これほど長く勤めた会社があっただろうか。ましてや、私には家族がいる。40歳手前で会社を退職するとはどういうことなのか。客観的に見たら、「あの人はなんて無責任なのだ」と思われても仕方がない。

今の日本は、終身雇用は終わったといわれている時代。長く勤めることが、決して良いとは思わない。特別なスキルを持っていて、さらに、大企業に勤めていれば、いろいろなところから声がかかるしオファーを受ける。そこからキャリアアップする、というのが、誰もが理想だと思う人生。

でも、それは大企業に勤めている前提、特殊スキルを持つての方が対象である。普通の一般企業に勤めている会社員に、そのチャンスは来ない。なので、転職を重ねれば重ねるほどキャリアがアップするどころか、次の会社に就職すればまた一からやり直し、これが一般的だろう。

そんなリスクを背負ってまで、会社を退職するとはどういうことなのか、あるときから、真剣に考えるようになった。リスクをとってまでしたいことはあるのか、日々自問自答していた。

今までで、最も長く勤めてきた会社なので、思い出はたくさんあり、そして、返しきれない恩もたくさんある。でも、このときはなぜかスッキリしていた。正直、不安や寂しい気持ちもあったが、それ以上、今までのモヤモヤした霧が一気に晴れ、急に日がさした感じだった。このときを待ちわびていたのかもしれない、何かのキッカケを。

「今がタイミングなのかもしれない。これを逃すと次はない」私はそう感じていた。

3人目の子どもが生まれてまだ2カ月ぐらいのときに、「これからの将来をどうするのか」と思われるかもしれない。それでも私は、人生で最も長くお世話になった会社を退職する決断をした。そして、同時に、以前から考えていた、強く決めた思いを実行することにした。